

漱石の「女の激しさ男の弱さ」

Junko Higasa 2014.1.2

漱石作品に出てくる「恐れない女と恐れる男」の中で「死も恐れない度胸」といえば『草枕』の那美さんと『行人』の直。「意思の強さで男に勝つ女」といえば『三四郎』の美禰子と『彼岸過迄』の千代子。それらの女たちには現状の運命に対する開き直りがある。恋に身を任せる大胆がある。『虞美人草』の藤尾とは違って内面は実に女らしい。したがってその幸せは自分を受け止める男次第である。こういう女たちには思考派よりも行動派で、細かいことに囚われない神経を持つ生活力のある男が最適だ。それに対して画工、一郎、三四郎、須永は考える...考える...未来を想像して考えすぎた挙句、相手の熱情に応える度胸と自分に対する自信を徐々に失って優柔不断になる。そこへ必ず天然ライバルが現れて、内心で将棋や囲碁の一手を躊躇するごとく悩む...悩む...悩んだ挙句、その恋を逃すことになる。そして「本当に愛していたのだろうか」と後々追想する。こういう男たちにはいざという時の度胸を発揮する女ではなく、最初から多少鈍い感性で生きている女が最適だ。だから結婚というのは一流同士では続かないのである。女は夢を食べない。男は夢を食べる。だから男は理想の女と現実の女の間で思い悩むのである。

漱石はあばた面を気にする上に、理性が強すぎた。理性には自己防衛機能も付随する。だから大胆になれず、天然自然の鈍感男に恋を譲ることになる。